

經濟論叢

第八十六卷 第二號

- 労働市場論なき賃金論……………岸 本 英 太 郎 1
- ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 19
- イギリス革命における農業・
土地問題分析の視角……………尾 崎 芳 治 47
- 社会科学のひとつの立場……………出 口 勇 藏 61
- 《記 事》
- 昭和三十五年度京都大学経済学会大会における公開講演
および研究報告の要旨…………… 74
-

昭和三十五年八月

京 都 大 学 經 濟 學 會

国際間における市場価値と 個別的価値

鈴木重靖

を個別的価値の問題と混同することによって、事実上労働価値説の基本的命題そのものの修正を行ったことである。教授がこのような誤謬におちいったのは、教授が市場価値と個別的価値との関係——前者は生産条件の標準を条件とするが後者はこれを条件としないということ——を明確に認知しえず、ために、国際間においては、生産条件の標準を条件としたもの（あるいは生産条件の相違及至これにもとづく生産力の相違を還元したもの）を個別的価値とみるという誤てる論理をみちびいたからである。しかしこのような論理はマルクス労働価値説そのものの修正である。一国内であろうと国際間であろうと市場価値と個別的価値との前記の基本的関係は相違しない。ただ相違するのはかかる生産条件の標準のあり方である。つまり競争が制限されている国際間では、生産条件の標準は一国内の場合のようにすべての商品に完全乃至それに近い形で成立するわけにはいかないのである。そこで国際間では、たとえ国際市場に登場している商品でも、金商品の如きものは別として、多くの商品は、完全乃至それに近い形で単一の市場価値は成立せず、ただそれに向うところのある傾向のみが存在するのである。が、このことは、国際間における価値法則の根本的修正の問題ではなく、ただ価値法則の妥当の程度乃至妥当の仕方の問題である。

（山口大学助教授）

吉村正晴教授の見解を批判検討することによって、表記の問題に接近する。教授の誤謬は、国際間における市場価値の問題